

「六・四」天安門事件前後の習近平

— 『擺脫貧困』に見る地区党委員会書記時代の政治論 —

鈴木 隆

(愛知県立大学外国語学部中国学科准教授)

【要約】

本稿では、福建省寧徳地区党委員会書記時代（1988年～90年）の習近平について、習の著書『擺脫貧困』（福建人民出版社、初版1992年）を主な素材として、当時の習近平の政治論を考察する。貧困地域として知られた寧徳地区の発展のため、習は、経済中心主義の政策思考を唱導した。その根底には、富国強兵を求めるナショナリズムの強い信条があった。また、リーダーシップ論の中には、「紅二代」の血統主義に基づく、一種の選民意識にも似た使命感が見て取れる。1989年の六・四天安門事件に際し、習近平は、下からの民主化運動を、文革時の紅衛兵イメージに重ねて理解する一方、政治発展の漸進性と段階性、法制建設の重要性を強調した。事件の1つの教訓として、習は、腐敗を主因とする民心離反の危険性を銘記した。その際、彼の脳裏にあったのは、毛沢東と黄炎培による「窯洞の対話」であり、この対話は、習の政治認識にとって、今日まで規範的な意味合いを持っている。

キーワード：習近平の政治思想、六・四天安門事件、民主観念、反腐敗、リーダーシップ論

一 はじめに：習近平政権と個人研究の意義

本稿の目的は、1988年5月から90年4月にかけて、福建省寧徳地区党委員会書記を務めていた時期（以下、寧徳時代と呼ぶ。福建省在任期間の経歴は、表1を参照）の習近平について、政治思想史的分析を通じて、当時の習の政治認識を検討することにある¹。これは同様のテーマについて、筆者がこれまでに発表したいくつかの論考の継続課題として位置づけられる²。

本稿執筆時点（2017年6月現在）における現実政治との関わりから、地方指導者時代の習近平を取り上げる意義を述べるとすれば、差し当たりそれは、次の2つの点で、習近平指導部による一期目（2012～17年）の施政の総括と二期目（2017～22年？）の行方を展望する

¹ 筆者の力不足と紙幅の都合により、本稿では専ら、当該時期の習近平による政治言説の紹介に力点を置いている。それゆえ、同時代の他の指導者の主張や、党の重要会議で採択された基本文書との内容比較を通じて、1980年代末のより広い実践的・イデオロギー的コンテクストの中で、習の政治的立ち位置を、より明確に示すことができていない。言い換えれば、習の見解における独自性の有無やその中身について、本稿では回答を留保している。この方法論的限界は、筆者自身よく自覚しており、後日の課題としたい。なお、次注で挙げた県党委員会書記時代を扱った論文では、上記の点についても初歩的分析を行っている。他の指導者との比較の問題など、本誌掲載に当たって拙稿に有意義なコメントを寄せられた2名の匿名査読者に対し、特記して謝意を表す。

² 菱田雅晴氏との共著書では、2012年の党総書記就任以来、最高指導者としての習近平のガバナンス構想と政治認識を考察した。菱田雅晴・鈴木隆『超大国・中国のゆくえ3 共産党とガバナンス』（東京：東京大学出版会、2016年）、第3～6章。2017年に発表した論文では、河北省正定県党委員会に所属していた時期（1982年～85年、以下、正定時代）の政治論と指導の特徴を分析した。鈴木隆「〈スタート地点〉の習近平：県党委員会書記時代の政治認識とリーダーシップ」『国際情勢 紀要』第87号（東京：世界政経調査会国際情勢研究所、2017年3月）。鈴木隆「〈はじまり〉の反腐敗：県党委員会書記時代の習近平」『東亜』第593号（東京：霞山会、2016年11月）。

上で有益と思われる。

第一に、2012年から13年にかけて、党総書記と国家主席の地位に就いた習近平は、個人集権に邁進した結果、現在では、国政運営に対する習の制度的権力は、他の指導者に比べて優位な状況にある。権威の面でも、16年10月の共産党第18期中央委員会第6回全体会議（以下、18期6中全会の形式で略記）を経て、「核心」の称号を得るに至った。また、本年秋には第19回党大会が開かれ、政権の二期目がスタートする見込みだが、一期目以上に、習の個人的影響力の発揮・拡大が予想される。こうした状況に鑑みれば、習近平の政治的パーソナリティと思想傾向、リーダーシップの特徴を主な論点とする、オーソドックスな個人研究も、その重要性を増している。

第二に、習近平の政治的人脈形成の問題が挙げられる。これに関しては、最近、日本の新聞も、習近平の地方指導者時代に遡って、習本人と側近たちとのつながり取材した連載記事を組むなど、メディアを中心に関心が集まっている³。

2007年に中央政治局常務委員として最高指導部入りするまで、習近平は、四半世紀以上の長きにわたり、地方勤務を経験した。それゆえ、江沢民や胡錦濤に比べて、習は北京・中央政界での人脈に乏しく、代わりに、地方時代に見出した部下や同僚を抜擢して、自派の勢力拡大を図っている。19回党大会の前後にも、そうした背景を持つ一定数の者が、党政の要職に就くと見られる。これらの人々にとって、各々の任地で身近に接した習近平の言動は、自らの政治的営為を導く一種の規範的役割を果たすと推察される。本稿は、「習近平派」の顔ぶれの特定は意図していないが、彼・彼女らに部分的に

³ 「核心の中国 第3部 側近」シリーズの各記事、『朝日新聞』2017年4月13～17、19～30日、5月2～5、7日。

共有されているであろう、そうした政治的コードの解明も分析の視野に入れている。

表1 福建省在任期間（1985～2002年）の習近平の公式経歴

任期（年齢）	所属、役職（党、政府、人代、軍）
1985年6月～88年5月 （32～34歳）	福建省アモイ市党委員会常務委員 アモイ市副市長
1988年5月～90年4月 （34～36歳）	福建省寧徳地区党委員会書記 寧徳軍分区党委員会第一書記
1990年4月～93年9月 （36～40歳）	福建省福州市党委員会書記 福州市人民代表大會常務委員会主任
1993年9月～95年10月 （40～42歳）	福建省党委員会常務委員、福州市党委員会書記 福州市人民代表大會常務委員会主任 福州軍分区党委員会第一書記
1995年10月～96年2月 （42～42歳）	福建省党委員会副書記、福州市党委員会書記 福州市人民代表大會常務委員会主任 福州軍分区党委員会第一書記
1996年2月～99年8月 （42～46歳）	福建省党委員会副書記 福建省高射砲予備役師第一政治委員
1999年8月～2000年1月 （46～46歳）	福建省党委員会副書記、福建省省長代理 南京軍区国防動員委員会副主任、福建省国防動員委員会主任、省高射砲予備役師第一政治委員
2000年1月～02年10月 （46～49歳）	福建省党委員会副書記、福建省省長 南京軍区国防動員委員会副主任、福建省国防動員委員会主任、省高射砲予備役師第一政治委員 （1998年3月～2002年1月、清華大学人文社会学院マルクス主義理論・思想政治教育専攻在職研究生クラスで学ぶ、博士学位取得）

（出典）中共浙江省委黨史研究室編著『幹在實處 走在前列：中共浙江省第十一次代表大會以來』（杭州：浙江人民出版社、2007年）、頁318。「習近平同志簡歷」『人民網』（中國共產黨新聞網資料、2013年3月）、<http://cpc.people.com.cn/GB/64192/105996/6463136.html>、2017年6月5日最終確認。

二 代表的な先行研究と本稿の特色

香港や台湾で数多く刊行されている伝記類を除けば⁴、寧徳時代の習近平の言論・政治活動を扱った研究は少なく、ウィリー・ラム（Willy Wo-Lap Lam）や柴田哲雄の仕事が代表的なものである。ラムの著作は、地方の各任地での習の事績を比較的丁寧にフォローしているが、寧徳時代に関しては、不正な土地・建物取引をした咎により、数千人の地元官吏が処分された大規模な腐敗摘発の功績を紹介する程度にとどまる⁵。天安門事件への習の見解や対応も、十分に検討していない。

ラムは、習が福建省に勤務した17年間（表1）を、「無気力な年月」と総括し⁶、それ以前の正定時代や、のちの浙江省党委員会書記時代（2002～07年、以下、浙江時代）と比べても、きわめて低い評価しか与えていない。叙述に際しては、個人の回想を含む各種の新聞記事や伝記を多く用いる一方、寧徳時代の習近平の演説や文章を収録した基本資料集である『擺脫貧困』（福建人民出版社、2014年重印、初版刊行は1992年7月。以下、福建本と記す⁷）を、ほとんど参照していない。

これとは逆に、柴田の研究は、福建省在任時の習近平の政治・経済・外交論を中心的テーマとして取り上げ、次章以下の本文でもみるように、1989年の六・四天安門事件を契機とする習近平の民主主

⁴ 梁劍『習近平新傳』（香港：明鏡出版社、2012年）、など。

⁵ Willy Wo-Lap Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping: Renaissance, Reform, or Retrogression?* (New York and London: Routledge, 2015), p. 46.

⁶ *Ibid.*, p. 43.

⁷ 習近平『擺脫貧困』（福州：福建人民出版社、2014年重印、初版1992年7月）。

義観や清廉な政治への熱意に触れている⁸。ただしそこでの分析は、主に90年代後半に習が発表した数篇の文章に依拠したもので、福建本を系統的に利用していない点はラムと同じである。

以上の諸点を踏まえて、本稿では、福建本を主な素材として、寧徳時代の習近平の政治論について、主に、政治経済改革と天安門事件をめぐる認識を中心に考察する。加えて、先行業績では扱われていない論点として、習によるリーダーシップ論も検討する。その際、今日の習近平の発言はもちろん、正定時代や浙江時代との関連性に留意しつつ、議論を進める。

三 『擺脫貧困』の時代背景と史料的特徴

本論に入る前に福建本の性格について、簡単に説明しておく。著書『擺脫貧困』には、寧徳地区党委書記であった習近平が、1988年9月から90年5月までに物した演説や文章、計29編（中国語で計12万字）が収められている。執筆・発表の日付から明らかなように、この時期は、1980年代に本格化した改革開放の動きが一定の成果を上げつつも、政治経済改革の停滞や官僚の腐敗が深刻化し、その是正を求める民主化の呼び声が全国で高まる中、遂には89年6月に、六・四天安門事件が発生したという、中華人民共和国史上、きわめて重要な時期に当たる。

同時に、福建本の初版が1992年に出版された点に注目すれば、同年の初めには、当時の最高指導者であった鄧小平が有名な南巡講話を行い、これをきっかけに中国では、90年代以降の高度成長期に突入した。本書の刊行は、まさにこの入口のタイミングであった。実

⁸ 柴田哲雄『習近平の政治思想形成』（東京：彩流社、2016年）、82～83、183～184ページ。

際、福建本に寄せた序文の中で、項南（1980年から86年まで福建省党委書記）は、南巡講話の意義に言及している⁹。習近平も、跋文において（跋文の執筆当時、習は、寧徳の次の任地である福建省福州市の党委員会書記であった）、「改革開放は、懐をもっと大きくし、大胆に試みる必要がある。纏足の女みたいではいけない。これだと見定めたら大胆に実験し、大胆に突き進むことだ」との「鄧小平同志による今年の南巡」での言葉を引用しつつ、改革開放の推進を主張している¹⁰。93年に発表した論文でも、「社会主義市場経済」の発展のため、幹部たちに対し、変革の観念をもって、一層の思想解放と創造性の発揮を求めている¹¹。

他方で、福建本には、時期的にみて、当然あってしかるべきいくつかの重要なテーマに関する習の発言や記述が見当たらない。その代表例は、建国以来、共産党が提起した最も大胆な改革構想として知られる、1987年の第13回党大会での趙紫陽の政治報告に対する習近平の見解である。正定時代の習近平の政治論が、82年に開催された12回党大会の胡耀邦報告や、同大会で採択された党規約などの要点を踏襲していたことを考慮すると¹²、福建本の中に、13回党大会への言及がほぼ皆無であるのは、いかにも不自然である。また、天安門事件に関する論評も総じて少ない。

⁹ 項南「序」習近平、前掲『擺脫貧困』、頁2。以下の注において同書からの引用は、章題と頁数のみ記す。

¹⁰ 習近平「跋」、頁215。鄧小平「武昌、深圳、珠海、上海などでの談話の要点」中共中央文献編集委員会編、中共中央編訳局・外文出版社訳『鄧小平文選1982-1992』（東京：テン・ブックス、1995年）、373ページ。

¹¹ 翁世盛・劉明輝整理「習近平談領導」『領導文萃』（福州）、1993年Z1期（1993年3月）、頁8～9。

¹² 鈴木、前掲「〈スタート地点〉の習近平」、49～51ページ。

四 経済成長と富国強兵への渴望

福建本のタイトルを日本語に訳すと、「貧困からの脱出」である。書名が示す通り、本全体のテーマは、一も二もなく経済成長であり、貧しい寧徳地区の経済的テイクオフをいかにして実現するかである。経済特区であった前任地のアモイ市に比べて、寧徳地区は、同じ福建省にありながら、発展とは縁遠い地域であった。習近平の説明によれば、寧徳地区は全国で18ある貧困地域の1つであり、域内9県のうち、6つが「貧困県」に、総数のおよそ4割に当たる計51の郷鎮が「貧困郷鎮」に、それぞれ指定されていた¹³。1985年に実施された地区の一斉調査によれば、「全区の文盲と半文盲〔の人数〕は、農村労働力の40.3%」を占めていた¹⁴。

福建本に収められた文章を通じて浮かび上がるのは、発展のためのこうした劣悪な社会経済実態に直面しながらも、地元経済の発展のために、知恵を絞り、部下を叱咤激励する習近平の姿である。その際習は特に、「発展第一」の目標を幹部たちに共有させるべく、「経済の大合唱」すなわち、党政の各機関が調和のとれた1つの合唱団のように、経済中心主義の政策という「1つのメロディー、1つのリズムを重んじる」ことを繰り返し求めた¹⁵。同様の問題意識は、1982年のワールドカップで敗退したアルゼンチンのサッカーチームを反面教師として引き合いに出し、マラドーナ（Diego A. Maradona）のような一部のスタープレイヤーに依存しすぎることなく、チームプレイの大切さを説きながら、発展のための「戦略意識」を持たねば

¹³ 「把握住新的機遇」、頁67。「走一條發展大農業的路子」、頁180。

¹⁴ 「我應怎樣辦好教育」、頁176。以下の本文中、キッコー〔 〕には筆者の補注、または、必要に応じて中国語原文を記す。

¹⁵ 「提唱“經濟大合唱”」、頁10。

ならないとした発言にも見てとれる¹⁶。

経済政策に関して、習近平は、具体的な提案も数多く行っている。農村の余剰労働力の活用、茶などの商品作物の栽培奨励、林業の促進など、農業分野を中心に経済活性化のための色々なアイデアを出したほか、地区全体の経済発展や財政の基本方針についても、積極的に意見を表明した¹⁷。

これらの文章の中に、投資やコストの言葉が頻繁に登場することも注目される。例えば習近平は、成長を通じた貧困削減を呼びかける一方、産業振興では、域内の経済地理と産業配置の特性を踏まえて、費用対効果を勘案したメリハリのある投資を指示している。「投資についていえば、投入・産出係数の高低を、投資の量と投資先を決める際の基本的な根拠として、投資の傾斜政策を実行しなければならない。理由は非常に明白だ。1つに、投資は『救済』ではなく、貧しいほど投資の割合を大きくするというにはならない。2つに、一定の期間内は、経済が比較的発展している地域ほど、投資のアウトプットも、より速く、より多いことが見込まれる」¹⁸。ここに見られるように、習近平は、鄧小平の先富論的発想を、正定時代以来、依然もち続けていた¹⁹。ほかにも、財源不足のため、インフラな

¹⁶ 同上、頁12。菱田・鈴木、前掲『共産党とガバナンス』、99ページ。

¹⁷ 「一種斬新資源の開発：談加強對農村富餘勞動力轉移的疏導」、頁166～171。「閩東的振興在“林”：試談閩東經濟發展的一個戰略問題」、頁110～114頁。「畬族經濟要更開放些」、頁108～109。「制定和實施產業政策的現實的政策」、頁127～132。「對閩東經濟發展的思考」、頁71～75。「新形勢下閩東經濟財政經濟的辯證觀」、頁101～107。

¹⁸ 「正確處理閩東經濟發展的六個關係」、頁96。

¹⁹ 正定時代の1984年11月には、社会主義を「絶対平均」とみなす考えを批判し、「先に富ゆたかになった一部の者が、共同で富裕になることをリードするとの観点」を持つことを主張した。習近平「深化改革要在思想上“五破五立”」『知之深 愛之切』（石家莊：河北人民出版社、2015年）、頁176。

どのハード面の優位性を欠く寧徳が、外資を呼び込むため、法的手続きの簡素化や行政サービスの向上など、「ソフトな環境整備」を進めるべきことを主張した²⁰。

こうした発言からは、寧徳の経済成長とそれを通じた自身の出世のため、国内の他地域との発展レースに負けまいとする習近平の強い意気込みが見てとれる。と同時に、その根底には、地方官僚の身でありながら、中国国家の富国強兵への夢と焦りがあったことも見逃せない。福建本の跋文で、習は、本書の「主旨はただ1つ、すなわち経済建設である」と述べる一方、それに付随してナショナリズムの強い心情を吐露している。

世界の先進国と比べたとき、中国は一部の方面で遅れている。遅れの原因は、歴史家たちがゆっくりと探求すればよい。しかし、多くの人の立場からいえば、奮い立って政治に励み、向上しようと堅く決意し、中国の繁栄隆昌を己の任とし、できる限り短い時間で、国家全体を「貧困から脱出」させ、できる限り短い時間で、中国を先進国グループの中に屹立させること。これこそが、いっそう切迫した、より実際的な思想と行動である。そして、この目標を実現するには、全人民がただ、経済建設を最大の政治とすることのみなのだ！²¹

²⁰ 「弱鳥如何先飛：閩東九縣調査雜感」、頁5。

²¹ 前掲「跋」、頁214。

五 六・四天安門事件の教訓

1 経済とイデオロギーの両立、「民主」と「法治」をめぐる文化大革命の記憶

既述の通り、習近平は、寧徳時代に天安門事件を経験した。大規模な民主化運動の発生とそれへの武力弾圧の衝撃は、中国全土を揺るがした。北京から遠く離れた福建の地にいた習近平にとっても、重大な政治的試練のときであったと思われる。

福建本の中に、事件の顛末に関するまとまった叙述は見当たらないが、6月4日の解放軍の天安門広場突入を挟んだ前後の時期には、下からの民主化要求への反論を旨とする、いくつかの注目すべき発言が残されている。それらは、今日まで引き継がれる習近平の基本的な政治主張である。

1つめは、政治改革における全面的西洋化、「ブルジョワ自由化」、及び「西側の多党制」のごとき競争的複数政党システムへの批判である²²。事件発生から半年後の1989年11月には、「先ごろ一時期『全面的西洋化』と『人民代表大会の役割』を弱めようとする傾向が現れたが、これは厳しく批判されなければならない」として、全人代を含む既存の政治制度を堅持すべきことを強調した²³。

2つめに、経済成長とともに、思想イデオロギー統制も決して疎かにしないとの態度である。習によれば、資本主義的要素の漸進的導入を柱とする経済改革（当時はまだ、社会主義市場経済ではなく、社会主義商品経済の用語が公的に通用していた）は、経済の発展に役立つ反面、資本主義の利己的価値観や拝金主義、商品の物神崇拜

²² 「建設好貧困地區的精神文明」、頁157。

²³ 「發揮人代作用、把閩東的事業推向前進」、頁138～139。

などの負の影響も必然的に強まる。それゆえ、「社会主義商品経済の発展とともに、思想政治工作の強化を忘れてはならず、社会主義精神の育成と道徳的資質の修養を強め」なければならず、「社会主義商品経済が発展しさえすれば、精神文明も自然に発展するとみなし、〔経済と精神の発展を〕等号で結んではならない」という²⁴。1990年1月には、農村の末端党組織が、「経済工作与思想政治工作で、『二本の手〔両手抓〕』を堅持しておらず、政治と経済の両活動が連携を失っている」状況を批判し、思想政治工作の強化を求めた²⁵。こうした「物質文明建設と精神文明建設」の同時追求²⁶、政治と経済における「両手論」的志向は、正定時代からの年来の持論でもあった²⁷。

また、天安門事件から5カ月後の1989年10月には、改革開放の過程で、外国の退廃的な思想・文化が流入し、それらに中国青年が感化される危険性を警告した。そして、「帝国主義の和平演変を防止しなければならない。このようにいうのは、『狼が来た』と叫んでいるのではなく、『狼』は間違いなくすでにやって来ているのだ。我々は社会主義の陣地を少しも失ってはならない」と述べて、自由主義陣営とのイデオロギー対決の姿勢を明らかにした²⁸。

3つめの注目点として、鄧小平や陳雲など、当時存命であった多くの長老政治家と同じく、習近平も、民主化を目指した学生と労働者による大衆運動の性格を、自身も多くの精神的・肉体的被害を蒙っ

²⁴ 前掲「建設好貧困地區の精神文明」、頁154。

²⁵ 「加強脫貧第一線的核心力量：建設好農村黨組織」、頁160。

²⁶ 前掲「建設好貧困地區の精神文明」、頁149。

²⁷ 鈴木、前掲「〈スタート地点〉の習近平」、58ページ。中共中央文獻研究室編『習近平關於協調推進“四個全面”戰略布局論述摘編』（北京：中央文獻出版社、2015年）、頁8。

²⁸ 「積極穩妥地推進共青團的改革」、頁146。

た文革の記憶、特に、紅衛兵運動のイメージに基づいて理解した。そのうえで、中国の国情と発展段階に即した「民主」の漸進的發展、前提としての「法治」の重要性を指摘した。1989年5月中旬、天安門広場で、民主化を求めるデモや集会への参加者が数十万人規模に増えつつあったその最中、習近平は、寧徳地区のメディア関係者を集めた新聞工作会議を招集し、当面の運動への見方を、次のように語っている。

現在取りざたされている一部の問題から見れば、民主主義〔民主〕のプロセス、法制建設のプロセスは確かに速めるべきだ。だが、どのように速めるか、どの程度まで速めるかについては、一定の科学的な段取りが必要で、民主主義を絶対化したり、超前化〔前提条件や手続きを軽視し、物事を性急に行おうとする態度のこと〕したり、一定の段階性を離れるならば、当然にもそれは不合理な要求であり、大いに間違ったものになってしまう。／何を民主主義というのか？なんでもかんでも、民主主義と呼ぶわけにはいかない。社会主義国家の民主主義について、わたしの個人的な理解では、人民の利益の一種の法制化の表現であるべきで、特定の階層や人々の恣意でもなければ、特定の人々や階層が提出するなんらかの要求を満たすことでもない。……民主主義それ自体を絶対化してはならず、一定の拘束が必要だ。同時に、民主主義の要求も段階的なもので、超前化はダメだ。……いかなる問題を提出するにせよ、その前提から離れてはならず、一定の背景から離れてはならず、一定の条件から離れてはならない。さもなければ、どのような問題もなく、どのような結論もない。「文化大革命」とは、まさに「大民主」のお手本ではなかったか？このような「大民主」は、科学と結びつかず、法制の結びつかず、むしろ迷信と

結びつき、愚昧と結びつき、結果はまさに大動乱であった。誰もがみな徒党を組んで家を荒らし、財産を没収することが許され、誰もがみな戦闘隊を率いることができた。今日はあなたがわたしをやっつけ、明日はわたしがあなたをやっつける。こうした日々を再び繰り返してよいのか？ 安定と団結がなければ、全ては話にならない！それゆえ、民主主義の問題は、法制のレールの上で解決されなければならない²⁹。

習近平は、文革期に提起された大民主のスローガンが、実際には無政府状態に陥った反省を踏まえ、民主主義を法治の文脈で理解し、実現すべきこと。すなわち、法制化を通じた個人の諸権利の画定・調整・制限として具体化すべきことを指摘した。習は、浙江省党委書記の地位にあった2006年4月にも、「民主は必ずや法治の軌道の上で運用されるべきだ。法治のない民主は、無政府の民主であり、まさしく『文化大革命』式の『大民主』である」と述べて、民主の前提としての法治を主張した³⁰。こうした発言からは、法治に対する習の問題意識の大きさが窺える³¹。

2 汚職腐敗に基づく民心離反の危険と「歴史の周期律」

ほかにも習近平が、天安門事件から学んだ大きな政治的教訓は、反腐敗の重要性であった。習のみるところ、民主化運動の主因は、汚職の蔓延に対する民衆の反発であった。早くも1980年代初頭には、習近平は、経済犯罪の取り締まり、すなわち反腐敗の施策を、

²⁹ 「把握好新聞工作的基點」、頁81～82。

³⁰ 習近平『幹在實處 走在前列：推進浙江新發展的思考與實踐』（北京：中共中央黨校出版社、2014年重印、初版2006年12月）、頁361。

³¹ 菱田・鈴木、前掲『共産党とガバナンス』、117～118頁。

改革開放時代の新たな階級闘争と位置づけ、その長期的実践の必要性を認めていたが³²、天安門事件はその認識をさらに深めた。習は、前項でみた大民主への痛烈な批判の言葉に続けて、「人々の義憤を最も引き起こし易い」イシューとして、「腐敗問題」を挙げている³³。

1990年2月には、幹部が率先垂範して自身や近親者を監督し、汚職をなくすよう指示した。習いわく、「1989年の政治風波」は、「反面教育を与えた。すなわち、清廉な政治の建設が、我々共産党人の歴史的使命であり、この歴史的使命を担うことができないとすれば、民心を失い、敵に攻撃の突破口を与えてしまうということだ。……反腐败と清廉な政治を重んじること—我々にはかの選択肢はない」と³⁴。こうした問題意識に基づき、本稿の冒頭で述べたように、習は89年1月から一年余りの間、幹部の違法な土地占有と住宅建設、収賄など、不正の摘発を大々的に進めた³⁵。

1990年5月に発表した寧徳離任の挨拶文でも、①「大衆路線がわが党の根本の活動路線」であり、いかなる理由であれ、「大衆から遊離してはならない」こと、②しかるに近年では、「腐敗現象が一定程度蔓延し、官僚主義の業務態度も一定程度発展し、党と人民大衆の血肉の関係を様々に弱めた」結果、「敵対分子がこの機に乗じてつけ入るスキを与えてしまった」との反省の弁を語っている³⁶。周知のように、近年、習近平は、トップリーダーとして、反腐败と綱紀肅正の取り組みを強力に推進しているが、その際にも、同様の発言を繰

³² 鈴木、前掲「〈スタート地点〉の習近平」、57ページ。

³³ 前掲「把握好新聞工作的基點」、頁82。

³⁴ 「廉政建設是共產黨人的歷史使命」、頁26～27。

³⁵ 同上、頁27～28。梁劍、前掲『習近平新傳』、頁174。Willy Wo-Lap Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping*, p. 46.

³⁶ 「同心同德 興民興邦：給寧徳地直機關領導幹部的臨別贈言」、頁208～209。

り返している。

腐敗問題などに起因する政権への支持喪失に関して、興味深いことに、習は福建本の中で、非共産党員で民主派人士の黄炎培が、1945年7月に陝西省延安を訪問した際に、毛沢東と交わした会話の内容を紹介している。このエピソードは、延安地方で多く見られる伝統的住居で二人の対談が行われたことから、住居建築の名前をとって、「窑洞^{ヤオトン}の対話〔窑洞対〕」と呼ばれ、中国では広く知られている。それは、大略次のようなものである。

黄炎培によれば、中国の歴代王朝は、始まりの勃興段階では、治者の側も、一意専心、善政に努めるが、支配が安定するに伴い、緊張感をなくし、国政もなおざりとなり、遂には「皇帝が怠けて政治を顧みず、宦官が権勢をふるう」、「優秀な指導者の不在により、政治が停滞する」などの挽回不能の状態に陥り、統制力を失って滅亡した。従来王朝の興隆と衰退は、全てこのサイクルを踏襲してきたが、共産党には、是非とも、この「周期律の支配」を打破するための新たな方策を見つけ出してもらいたい、と。これに対して毛沢東は、自分たちはすでにその手立てを得ており、「この周期律から抜け出すことができる。この新しい方法こそ、まさに民主主義〔民主〕である。人民に政府を監督させてこそ、政府は怠け心を起こさなくなる。皆が立ち上がって責任を負ってこそ、優秀な指導者の不在により、政治が停滞することはなくなる」と答えた³⁷。

この窑洞の対話について、習近平は、1989年1月の発表日付を持つ文章で、毛と黄の対話を紹介しつつ、毛沢東のいう「民主」を「大

³⁷ 黄炎培『八十年來 附《延安歸來》』（北京：文史資料出版社、1982年）、頁148～149。黄炎培『延安歸來』（重慶：國訊書店、1945年10月上海再版、1945年7月重慶初版）、頁64～65（民國叢書編集委員會『民國叢書』第五編79、上海：上海書店、1996年、所収）。

衆路線を歩むこと」と同定し、党と人民の緊密な連携を維持すべきことを力説した³⁸。習はその後も、審洞の対話にたびたび言及している。浙江時代の2006年2月には、『浙江日報』紙のコラムで、党政幹部の紀律が弛緩すれば、「国家をして、『皇帝が怠けて政治を顧みず、宦官が権勢をふるう。優秀な指導者の不在により、政治が停滞する』という歴史の周期律に陥ってしまうだろう」と記している³⁹。

近年では、2013年4月に実施された中央政治局の集団学習会で、「歴史の周期律」をめぐる毛と黄のやりとりに触れ⁴⁰、16年10月の18期6中全会でも、「早くも延安時期に、毛沢東同志は、『歴史の周期律』を突破するとの課題を提起した」と述べた⁴¹。15年5月に開かれた中央統一戦線工作会議に出席した際には、「わたしはよく、毛沢東同志と黄炎培先生による延安の『審洞の対話』に言及する。当時の『審洞の対話』の問題は、もはや徹底的に解決されたのである

³⁸ 「幹部的基本功：密接聯系人民群眾」、頁15。審洞の対話について、習近平による紹介は、次の通り。「黄炎培先生曾對毛澤東同志說過、一人、一家、一團體、一地方、乃至一國、不少都沒有跳出周期律的支配力。大凡初聚時聚精會神、沒有一事不用心、沒有一人不賣力、也許那時艱難困苦、只有從萬死中取覓取一生。繼而漸漸好轉了、精神也漸漸放下了。惰性發作、由少數演為多數、到風氣養成、雖有大力、無法扭轉。黄炎培希望“中共諸君”能夠跳出一條新路、跳出歷代統治者從艱苦創業到脫離群眾的周期律。毛澤東同志當即回答、我們已經找到了新路、我們能跳出這個周期律、這條新路就民主、走群眾路線。只有讓人民來監督政府、政府才不敢鬆懈。只有人人起來負責、才不會人亡政息」。共産党の宣伝文句による下線部分の補足説明と、一部が口語表現に修正されているほかは、注37の各テキストの該当箇所をほぼ忠実に引用している。

³⁹ 習近平「激濁揚清正字當頭」『之江新語』（杭州：浙江人民出版社、2015年1月重印、2007年8月初版）、頁176。

⁴⁰ 中共中央紀律檢查委員會・中共中央文獻研究室編『習近平關於黨風廉政建設和反腐敗鬥爭論述摘編』（北京：中國方正出版社・中央文獻出版社、2015年）、頁6。

⁴¹ 中共中央文獻研究室編『習近平關於全面從嚴治黨論述摘編』（北京：中央文獻出版社、2016年）、頁214。

うか？おそらくまだ解決されていない」と発言した⁴²。

このように、審洞の対話と歴史の周期律の問題は、習近平の政治認識において、一貫して大きなウェイトを占めている。この点、ラムは、「毛沢東主義のエキスパートである習は、恐るべき独裁者〔毛沢東を指す〕が、王朝盛衰の権威であったりべラルな学者の黄炎培と交わした非常に意義深い対話を、知らずに見逃しているのかもしれない」と述べているが、これは明らかに誤っている⁴³。王朝交代の歴史的陥穽を回避すべく、毛沢東のいう「民主」を、習が強く意識していることは疑いない。だが習は、「民主」の内実を、ラムが期待するような欧米型のデモクラシーではなく、習近平なりの解釈と仕方―大衆路線、批判と自己批判の強調などに見られる通り、それらが毛沢東主義の部分的影響の下にあることは事実だろう―で、実行しようとしているのである。

六 政治指導、リーダーシップ論

1 リレー式の政治・歴史意識と〈歴史の中のわたし〉

県党委書記であった正定時代(1982年3月～85年6月)に比べて、寧徳時代には、習近平は、理想的な指導者像やリーダーシップのありかたについても積極的に語っている。この理由としては、地区党委書記として党内序列が上がったことが推察される。自分自身の出世に伴い、目指すべき党官僚兼政治家の姿についても、いわば、人に使われるだけでなく、人を使う立場にまで思索の幅が広がり、同時に、前者から後者へと重点がシフトしていくのは自然なことであろう。

⁴² 同上、頁204。

⁴³ Willy Wo-Lap Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping*, p. 131.

寧徳地区の社会経済水準の底上げを図るため、習近平が心を砕いていたこと、それが富国強兵を目指すナショナリズムの信条に支えられていたことは、既述の通りである。だが習は、そうした焦りの気持ちを心にとどめ、実際の指導では、むしろ長期的で漸進的な取り組みを求めた。その証拠に、福建本の中には、「点滴石を穿つ」の表現がなんども登場する⁴⁴。以下に見るように、寧徳時代の習近平にとって、この言葉は、社会経済の発展観の基礎にして、党政幹部が持つべき政治的覚悟を象徴している。

1990年3月、習近平は、「自らが官僚生活の過程で学んだこと、実践を通じて会得したこと」を踏まえて、「青年指導幹部がいかにして業務を適切にやり遂げるかという問題」について意見を開陳した⁴⁵。言い換えればこの文章は、習自身の体験に基づき、優れたリーダーシップの要訣を解説したものである。そこでは、指導経験の乏しい青年幹部が犯しやすいミスとして、(a) 手柄への焦り、(b) 能力過信、(c) 朝令暮改、(d) 過大な目標設定、の4つが挙げられている。

このうち(a)に関し、習近平は、①「事物の発展変化は漸進的過程であり、質的变化をもたらすには、量的変化の蓄積が必要」なこと、②「『質的变化』を生むような突破的な仕事」だけでなく、「『量

⁴⁴ 「把心貼近人民：談新形勢下領導的信訪工作」、頁64。前掲「把握住新的機遇」、頁68。前掲「同心同德 興民興邦」、頁204、など。

⁴⁵ 「從政雜談」、頁31。本文は、福建省領導科學研究會の求めに応じて執筆された。同会は、省党校の関連団体として1989年に設立され、党政幹部や党校の研究者らが参加し、92年時点で約500名の会員を擁していた。うち半数が県級以上の幹部であった。劉明輝「建會三年進展顯著：福建省領導科學研究會介紹」『領導文萃』（福州）、1993年Z1期（1993年3月）、頁94。習近平は、福州市党委書記の時期に、その青年部会である福建省青年領導科學研究分會の會長に推薦された経緯がある。翁世盛「《習近平談領導》發表前後」、同上、2013年第8期（2013年4月）、頁21。

的变化』を生む累積的な仕事」にも力を入れる必要を指摘した⁴⁶。習によれば、そうした長期的視野に立った地道な活動こそが、寧徳のような貧困地域の発展には不可欠だ。遅れた現状には、歴史的背景や社会・自然環境など多くの要因があり、その克服には、「水滴が石を穿つような変化」しかない⁴⁷。1978年末の11期3中全会以来、寧徳での多くの成果も、こうした「漸進的・累積式の変化」であり、「量的変化から質的变化へと進んだ、点滴石を穿つ」の具現化にはかならないという⁴⁸。

量の蓄積による質の変化の強調は、文字通りの大国の政治家として、経済に限らず、政治、外交、文化、社会などの各政策領域において、発展というものに対して習近平が抱くイメージ、及び、その実現のための基本的アプローチを理解する上で、きわめて示唆的である。それはまた、毛沢東がしばしば述べた「質と量の相互転化」に、部分的着想を得たものであろう⁴⁹。

点滴石を穿つの精神は、習近平が理想とする幹部・指導者像にも関係する。「閩東幹部への評価は、彼が短期間の内にどれだけ人目を引く実績を上げたかではなく、長期的・基礎的〔鋪墊性〕な業務に

⁴⁶ 前掲「從政雜談」、頁34。

⁴⁷ 「滴水穿石的啓示」、頁58。

⁴⁸ 前掲「正確處理閩東經濟發展的六個關係」、頁90。

⁴⁹ 毛沢東「成都会議での講話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（上）』（東京：三一書房、1974年）、231ページ。毛沢東「哲学の問題についての講話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（下）』（東京：三一書房、1975年）、215～216ページ。質と量の相互転化、対立物の統一、否定の否定など、毛沢東のマルクス主義理解のキーワードについて、最近における習近平の言及は、例えば、習近平『在省部級主要領導幹部學習貫徹黨的十八屆五中全會精神專題研討班上的講話』（北京：人民出版社、2016年）、頁38。

心力を尽くしたかを重視する」との言葉に示される通り⁵⁰、習が求める幹部人材とは、「一点一滴の量の蓄積」に貢献するとともに、「前の者が倒れると後ろの者がそれを乗り越えて後に続き、犠牲になるだけの勇気〔前仆後継、勇于犠牲〕」の持ち主である⁵¹。

こうした言葉の裏側には、個々の指導者人事の如何にかかわらず、共産党人としての基本的な政治原則と、それまでに成し遂げられた統治と政策の蓄積を、代を超えて引き継いでいくことの自覚、言い換えれば、〈歴史の中のわたし〉の意識を見てとることができる。これに関して梁言順（中央党校校委委員、科研部主任）によれば、福建省在任当時、習は、幹部の指導スタイルの要点として、「リレー競争で一人ひとりがバトンを受け渡していくように、過去に採られた多くの有効なやり方を持続して行い、着実に成果を上げる」ことを繰り返し呼びかけたという⁵²。

習近平は、寧徳を離れた後も、バトン・リレーの比喩を用いて、幹部一人ひとりが、政権担当の責任感を持ち、長期的視野に立って政治的実績を追求すべきことを、折に触れて指摘している。浙江省党委書記であった2004年11月には、「指導的幹部は、正しい政治的実績観を導きとし、各種の活動を着実に実行すべきだ。……基礎的な〔鋪墊性〕業務を喜んで行い、まだ成し遂げられていない大事に進んで取り組むべきだ。……リレー競争と同じく、複数の指導者が任期を超えて行うことで、はじめて大事をなすことができる」として、大きな目標実現を見据えた主要な政策の継承と、その布石的業

⁵⁰ 前掲「從政雜談」、頁41。

⁵¹ 前掲「滴水穿石的啟示」、頁57。

⁵² 梁言順「“幹在實處”是習近平總書記的一貫主張和政治品格」何毅亭等著『學習《幹在實處 走在前列》』（北京：中共中央黨校出版社、2014年）、頁56。

務への注力を促した⁵³。引用文のうち、元々は敷物や下地を意味する中国語の「鋪墊」の単語は、寧徳時代からの問題意識が引き継がれていることを示唆する。習は07年3月にも、「現代化建設はマラソン・リレーのようなもので、指導的幹部は一任期、また一任期と、代を継いで大衆を導いて走り続ける必要がある。どの任期の指導的幹部も、受け取るのはただ、長い歳月に及ぶリレー競争の中の、ごく短い期間のバトンにすぎないのだ」と述べている⁵⁴。

こうしたリレー式の政治・歴史意識は、国政の最高責任者の地位を得て、習近平自身が〈歴史の中のわたし〉を、それまで以上により強く感得するようになると、一層声高に叫ばれるようになる。党総書記に選出された2012年11月の18期1中全会での講話と、その直後に開かれた記者会見で、習は、いわゆる第五世代の指導者として、「歴史のリレーのバトン」を受け継ぐことの重責に言及した⁵⁵。13年8月の全国思想宣伝工作会議では、自らの世代の幹部集団を、「リレー競争」の「1つのバトン」に見立てた上で、イデオロギー分野での優秀な実績を求めた⁵⁶。15年1月、中央党校が主催した県党委書記の研修セミナーに出席した際にも、各々の県の発展には、『『事業の成功を自分だけのものとして考えない』という見地』に立ち、「リレー競争のように、ある走者から別の走者へとバトンを受け継いで

⁵³ 習近平「要甘於做鋪墊之事」前掲『之江新語』、頁87。同趣旨の発言として、習近平、前掲『幹在實處 走在前列』、頁35、頁421、など。

⁵⁴ 習近平「新官上任要善於“瞻前”、注意“顧後”」前掲『之江新語』、頁266。

⁵⁵ 習近平「在黨的十八屆一中全會上的講話」中央黨的群眾路線教育實踐活動領導小組弁公室編『黨的群眾路線教育實踐活動學習文件選編』（北京：黨建讀物出版社、2013年、内部発行）、頁12。習近平「在十八屆中共中央政治局常委同中外記者見面時的講話」、同上、頁18。

⁵⁶ 習近平「把宣傳思想工作做得更好」『習近平談治國理政』（北京：外文出版社、2014年）、頁153。

いかなければならない」と発言した⁵⁷。

改めていうまでもなく、習近平がリレー式の政治・歴史意識を強調するのは、父親の習仲勲をはじめ、父祖の世代の先輩共産党人が苦勞の末にうち立てた現体制を維持し、将来に向かって受け渡すための継承の責任を、習自身が強く意識していることの表れでもある。それはまた、「紅二代」の家系に生まれた中国共産党版のノーブルス・オブリージュ（noblesse oblige）の価値観、または、一種の選民意識の反映とも言えようか。

2 受け手としての「圧力」論

福建本には、習近平によるリーダー論や政治指導のモットーを述べた記述が、ほかにも数多く散見される。なかでも、年若い指導者が直面する様々な圧力への対処法のアドバイスは、汚職撲滅に尋常ならざる決意を見せる現在の習近平の姿に重ね合わせて読むと、今日の彼の心情を推し量る一助となろう。前項で示した、青年幹部が犯しやすい4つの指導上の誤りのうち、(c)の朝令暮改、すなわち、政策や指示の短期間の頻繁な変更について、習は次のように警告している。

青年幹部は着任したばかりの頃は、上手くいってもいかなくても、一定の時間が経つと、色々な議論が必ずや聞こえてくるものだ。賞賛や肯定もあれば、疑念や反対もある。大衆が注目するホットな問題の処理や、特定の個人が責任を負い主導的立場で切迫

⁵⁷ 習近平「做焦裕祿式的縣委書記」『做焦裕祿式的縣委書記』（北京：中央文献出版社、2015年）、頁9。同様の言葉として、習近平「以新的發展理念引領發展、奪取全面建成小康社会決勝階段的偉大勝利」中共中央文獻研究室編『十八大以來重要文獻選編（中）』（北京：中央文獻出版社、2016年）、頁822～823。

した問題を処理する時には、議論が特に喧しい。青年幹部は執政経験が少ないため、何かあればすぐに反応し、こうだと決めてかかる。……疑念と反対には心を挫かれ、ひいては問題の処理に迷いや心配が生じる。特に、当地において人格高潔で名高い人、部署の中で権威のある人、学术界の名士から、古くから顔なじみの同窓生や職場の同僚、戦友、同郷の人から、自分を引き立て面倒をみてくれた昔の上司から、あれこれ言われると、一部の青年幹部はどうしていいか分からずに、考えを失ってしまう。／わたしが思うに、「事前の熟議と計画があれば、事後に迷うことはない」。政策を決める前に、まずは、多様な情報と意見をしっかりと聴取し、……直面する問題の本質を深く理解し、法則性を見出し、協議を経て判断を下す。一旦決定したら、問題解決の過程でまだそれが終わらない内は、自分から変更しない。……一時の議論に左右されたり、束の間の支持や反対に惑わされたり、時流に迎合してはならない。固い信念と正確な決定が、多くの人々に理解され、問題が徐々に解決されるにつれて、種々の議論も自然にやむだろう。終息の過程はまた、あなたが承認を得る過程でもあるのだ⁵⁸。

政策担当者の朝令暮改を戒めるにあたり、習近平がなぜ、意思決定の軽率さという主体の問題ではなく、周囲のプレッシャーを受ける客体の立場から、抵抗の意志と初志貫徹を呼びかけたのか、その理由は分からない。おそらくは彼自身、同様の圧力になんども遭遇し、既定の方針を撤回したり、中途半端な妥協を余儀なくされたりして、苦い経験を積み重ねてきたのだと思われる。

実際、寧徳時代は、習近平もまだ30代半ばの年齢であり、地区党

⁵⁸ 前掲「從政雑談」、頁35～36。

委書記とはいえ、全国はもとより、福建省の党政の組織体系の中でも、中堅幹部の1人にすぎなかった。最高指導者としての習が、一部の長老政治家や現役の有力官僚、すなわち、引用文の言葉でいえば、「自分を引き立て面倒をみてくれた昔の上司」や「部署の中で権威のある人」など、周囲の人々からの多くの有形無形の圧力や反対にもかかわらず、腐敗追及の手を緩めない、ブレないリーダーを演じるようになるには、先の発言からなお二十年余りの時間を待たなければならなかった。

付言すれば、習が、受け身の立場ではなく、目標達成の指導技術として、送り手の側から、つまり、隷下の人々にプレッシャーをかける上役として、「圧力」を本格的に論じるようになるのは、さらに出世の階段を上り、より確固たる地位を得る必要があったと思われる。この点について、筆者がこれまでに確認した限り、省党委書記となった浙江時代以降のことである。政治的プレッシャーの能動的利用について、福建本の中で習は、大慶油田の労働模範にして、「油田の鉄人」と称された王進喜の名を挙げ、「人は圧力がなければダメだ。王進喜はかつて次のように述べた。油井は圧力がなければ、石油は出ない。人は圧力がなければ、フラフラとして真面目に取り組まない〔輕飄飄〕」と記している⁵⁹。素朴な言い回しだが、このフレーズは、浙江時代の習近平が政治指導とリーダーシップの問題を語る際の、常套句の1つとして登場するようになる⁶⁰。

⁵⁹ 「閩東之光：閩東文化建設隨想」、頁21。王進喜の人物については、「新中国の国民的英雄：王進喜」『チャイナネット』2009年9月18日、http://japanese.china.org.cn/life/txt/2009-09/18/content_18550684.htm、2017年6月5日最終確認。

⁶⁰ 一例として、習近平、前掲『幹在實處 走在前列』、頁524。浙江省党委書記時代の習近平については、稿を改めて論じる。

七 結語

寧徳時代の習近平の政治論について、筆者は本稿において次のことを明らかにした。

第一に、全国有数の貧困地区である寧徳で、習は、開発を通じた貧困削減に力を尽くす一方、部下たちに対し、経済中心主義の目標意識と政策思考の徹底を指示した。焦燥感に近い、発展への基底志向の根本には、〈強い中国〉を希求するナショナリズムの強い信条があった。

第二に、1980年代末の中国における自由化に向けた社会的高揚と、デモクラシーを標榜する大衆運動の盛り上がりは、習近平に文化大革命の記憶を想起させた。習は、下からの民主化運動を、紅衛兵による暴力と混乱の批判的認識フィルターを通じて理解した。また、当時の習の民主主義観の特徴として、中国の国情を重視した政治発展の漸進性と段階性、法制建設の重視が挙げられる。

第三に、六・四天安門事件は、習近平にいくつかの重大な政治的教訓を与えた。一つは、改革を通じて近代化を推進するとともに、和平演変を防ぐため、イデオロギー統制の手綱を決して緩めないこと。いま一つは、同じく発展のテンポに合わせて、政治腐敗への対応に努めることである。腐敗を主因とする民心離反に危機感を強めた習の脳裏にあったのは、毛沢東と黄炎培による窯洞の対話であった。この対話は、習の政治認識にとって、今に至るまで規範的性質を有している。

第四に、寧徳時代の習近平にとって、理想的な幹部・指導者像とは、点滴石を穿つ精神と〈歴史の中のわたし〉を心に刻み、先輩共産党人から引き継いだ支配のバトンを、未来に向かって確実に受け渡すべく、個人の功績や任期の時間的制約に拘泥せず、より大き

な政治目標の実現とそのため基礎的・継続的事業に専心する人物であった。こうした主張は、紅二代の出自に由来する、中国共産党版のノーブレス・オブリュージュ、血統主義に基づく一種の選民意識にも似た使命感の表れでもある。

第五に、同じくリーダーシップ論の観点から、習近平はまた、重要政策の朝令暮改を戒め、初志貫徹を阻む様々なプレッシャーへの抵抗を唱導した。地区党委書記の当時、圧力に負けない堅固な意志の必要性を説いた習近平の言葉からは、党総書記となって以降、多くの反対や抵抗を排して、反腐敗キャンペーンを推進する習の心の一端を窺い知ることができよう。

寧徳時代、天安門事件の試練に遭遇した習近平は、自らも多くの辛酸をなめた文革の再来を防ぐことを理由に、鄧小平や陳雲ら当時の指導層による暴力的抑圧を間接的に支持した。だがそれは、事件の当事者はもちろん、それ以外の多くの人々にとっても、文革とならぶ痛苦と悲しみに満ちた出来事を、中国現代史の年表に新たに付け加えることになった。この結果、今日、習近平は、支配のバトンを受け渡すため、人々の脳裏に埋め込まれた民主化運動の記憶に対し、負けないかもしれないが、おそらくは勝つ見込みのない消耗戦を一世界大に拡がるインターネット情報と、即物的には天安門広場がそこにある限り、人々は六・四を忘れることはないだろう—強いられることとなった。

(寄稿：2016年6月11日、採用：2016年7月6日)

「六四天安門事件」前後の習近平

—從『擺脫貧困』一書研析地區黨委員會書記時代之習近平的政治理論—

鈴木 隆

(日本愛知縣立大學外語學院中國學系副教授)

【摘要】

本文欲以習近平之著述『擺脫貧困』（福建人民出版社，初版 1992 年）為主要研究文獻，研析時任福建省寧德地區地方黨委員會書記（1988～90 年）的習近平之政治理論。中國寧德地區為周知的貧瘠區域，習近平為促進該區經濟發展，提倡經濟發展中心主義。這樣的思路依據是追求富國強兵，強烈的民族主義教條之下的產物。另一方面，若以「領袖論」分析，可解釋為是基於「紅二代」嫡系正統性的使命感，近似宗教理論中，神的子民的選民意識的使命感。1989 年六四天安門事件爆發之際，習近平將其理解為近似於文革時期的紅衛兵運動，認為其訴求為漸進式、階段性的政治發展，法治建設的重要性。習近平也從此事件銘記深刻教訓，即腐敗將造成民心背離的致命危機。同時，習近平的腦海所浮現的是毛澤東和黃炎培的『窯洞對』，而這段對話對習近平的政治認知至今有著象徵性的意義。

關鍵字：習近平的政治思想、六四天安門事件、民主觀念、反腐敗、領袖論

Up and Out of Poverty: Xi Jinping's Political Thought as Local Party Leader of during the Tiananmen Era

Takashi Suzuki

Associate Professor, Department of Chinese Studies, School of Foreign Studies, Aichi Prefectural University

[Abstract]

This article examines Xi Jinping's personal political beliefs by analysing his political discourse during the Tiananmen era (1988-1990) as showcased in his first personal monograph, *Up and Out of Poverty* (擺脫貧困). As local party secretary in Ningde District in Fujian Province, Xi's pro-development policies to address notoriously poor local socio-economic conditions evince a strong nationalist sentiment to create a strong and prosperous China. Xi's commentary on political leadership during this period likewise reveals a deep sense of purpose under and attachment to the CCP regime, due to his family ties to the first generation of CCP elites. Subsequently, Xi opposed the mass democratic movement culminating in the Tiananmen Square Incident in June 1989 and instead emphasized a gradual and phased course of political reform, perceiving protestors' bottom-up political pressures as a repeat of the chaotic Cultural Revolution. For Xi, Tiananmen exposed the dangers of political corruption for the CCP's political legitimacy. In this vein, Xi closely study the phenomenon of dynastic change throughout Chinese political history and related commentary, particularly focusing on Mao Zedong and Huang Yanpei's 1945 "Yaodong Dialogue" (窯洞對). Such concerns over political upheaval have formed one of the cornerstones of Xi's political thought and behavior as President.

Keywords: Xi Jinping's political thought, June 4 Tiananmen Incident, Xi's perception of Chinese democracy, anti-corruption, leadership

〈参考文献〉

- 「核心の中国 第3部 側近」シリーズ『朝日新聞』2017年4月13～17、19～30日、5月2～5、7日。
- 「新中国の国民的英雄：王進喜」『チャイナネット』、2009年9月18日 http://japanese.china.org.cn/life/txt/2009-09/18/content_18550684.htm、2017年6月5日最終確認。
- 柴田哲雄『習近平の政治思想形成』（彩流社、2016年）。
- 鈴木隆「〈はじまり〉の反腐敗：県党委員会書記時代の習近平」『東亜』第593号（霞山会、2016年11月）。
- 鈴木隆「〈スタート地点〉の習近平：県党委員会書記時代の政治認識とリーダーシップ」『国際情勢 紀要』第87号（世界政経調査会国際情勢研究所、2017年3月）。
- 鄧小平「武昌、深圳、珠海、上海などでの談話の要点」中共中央文獻編集委員会編、中共中央編訳局・外文出版社訳『鄧小平文選1982-1992』（テン・ブックス、1995年）。
- 菱田雅晴・鈴木隆『超大国・中国のゆくえ3 共産党とガバナンス』（東京大学出版会、2016年）。
- 毛沢東「成都会議での講話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（上）』（三一書房、1974年）。
- 毛沢東「哲学の問題についての講話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（下）』（三一書房、1975年）。
- 「習近平同志簡歴」『人民網』（中國共產黨新聞網、2013年3月）、<http://cpc.people.com.cn/GB/64192/105996/6463136.html>、2017年6月5日最終確認。
- 中共中央文獻研究室編『習近平關於協調推進“四個全面”戰略布局論述摘編』（北京：中央文獻出版社、2015年）。
- 中共中央紀律檢查委員會・中共中央文獻研究室編『習近平關於黨風廉政建設和反腐敗鬥爭論述摘編』（北京：中國方正出版社・中央文獻出版社、2015年）。
- 中共中央文獻研究室編『習近平關於全面從嚴治黨論述摘編』（北京：中央文獻出版社、2016年）。
- 中共浙江省委黨史研究室編著『幹在實處 走在前列：中共浙江省第十一次代表大會以來』（杭州：浙江人民出版社、2007年）。
- 翁世盛・劉明輝整理「習近平談領導」『領導文萃』1993年Z1期（福州：1993年3月）。
- 翁世盛「《習近平談領導》發表前後」『領導文萃』2013年第8期（福州：2013年4月）。
- 習近平「一種斬新資源的開發：談加強對農村富餘勞動力轉移的疏導」「加強脫貧第一線的核心力量：建設好農村黨組織」「正確處理閩東經濟發展的六個關係」「走一條發展大農業的路子」「同心同德 興民興邦：給寧德地直機關領導幹部的臨別贈言」「把心貼近人民：談新形勢下領導的信訪工作」「把握住新的機遇」「把握好新聞工作的基點」「我應怎樣辦好教育」「制定和實施產業政策的現實的政策」「建設好貧困地區的

- 精神文明」「弱鳥如何先飛：閩東九縣調查雜感」「從政雜談」「跋」「發揮人代作用、把閩東的事業推向前進」「提唱“經濟大合唱”」「新形勢下閩東經濟財政經濟的辯證觀」「廉政建設是共產黨人的歷史使命」「畚族經濟要更開放些」「幹部的基本功：密接聯系人民群眾」「滴水穿石的啓示」「閩東之光：閩東文化建設隨想」「閩東的振興在“林”：試談閩東經濟發展的一個戰略問題」「對閩東經濟發展的思考」「積極穩妥地推進共青團的改革」『擺脫貧困』（福州：福建人民出版社、2014年重印、初版1992年7月）。
- 習近平『幹在實處 走在前列：推進浙江新發展的思考與實踐』（北京：中共中央黨校出版社、2014年重印、初版2006年12月）。
- 習近平「要甘於做鋪墊之事」「新官上任要善於“瞻前”、注意“顧後”」「激濁揚清正字當頭」『之江新語』（杭州：浙江人民出版社、2015年1月重印、2007年8月初版）。
- 習近平「在十八屆中共中央政治局常委同中外記者見面時的講話」「在黨的十八屆一中全會上的講話」中央黨的群眾路線教育實踐活動領導小組辦公室編『黨的群眾路線教育實踐活動學習文件選編』（北京：黨建讀物出版社、2013年）。
- 習近平「把宣傳思想工作做得更好」『習近平談治國理政』（北京：外文出版社、2014年）。
- 習近平「做焦裕祿式的縣委書記」『做焦裕祿式的縣委書記』（北京：中央文獻出版社、2015年）。
- 習近平「深化改革要在思想上“五破五立”」『知之深 愛之切』（石家莊：河北人民出版社、2015年）。
- 習近平『在省部級主要領導幹部學習貫徹黨的十八屆五中全會精神專題研討班上的講話』（北京：人民出版社、2016年）。
- 習近平「以新的發展理念引領發展、奪取全面建成小康社會決勝階段的偉大勝利」中共中央文獻研究室編『十八大以來重要文獻選編（中）』（北京：中央文獻出版社、2016年）。
- 梁言順「“幹在實處”是習近平總書記的一貫主張和政治品格」何毅亭等著『學習《幹在實處 走在前列》』（北京：中共中央黨校出版社、2014年）。
- 梁劍『習近平新傳』（香港：明鏡出版社、2012年）。
- 黃炎培『八十年來 附《延安歸來》』（北京：文史資料出版社、1982年）。
- 黃炎培『延安歸來』（重慶：國訊書店、1945年10月上海再版、1945年7月重慶初版）、（民國叢書編集委員會『民國叢書』第五編79、上海：上海書店、1996年）。
- 項南「序」『擺脫貧困』（福州：福建人民出版社、2014年重印、初版1992年7月）。
- 劉明輝「建會三年進展顯著：福建省領導科學研究會介紹」『領導文萃』1993年Z1期（福州：1993年3月）。
- Lam, Willy Wo-Lap, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping: Renaissance, Reform, or Retrogression?* (New York and London: Routledge, 2015).

